

## IV. 英語教育研究

### 目 次

- 1 はじめに
- 2 初めての外国語の授業づくりからみえてきたもの  
～小・中学校の連携をめざして～
- 3 使いたくなる英語の場づくり  
～児童が英語を学ぶモチベーション～
- 4 「書く」を楽しむために  
～文字を書けるようにするための取組みでできること～
- 5 今だからこそ小学校外国語専科に求められること  
～授業と連携と、ときどき、評価～

# 1 はじめに

## 1 英語教育研究会について

新学習指導要領に小学校の外国語活動・外国語科が教科として明示され、小・中学校における外国語教育の授業づくりや連携のあり方が大きく変わることになった。そこで、英語教育研究会では、新学習指導要領に対応する授業実践について、関西大学外国語学部竹内理教授の指導助言のもとに研究に取り組んだ。

## 2 研究テーマ

全体テーマ：「新学習指導要領に対応する授業実践の研究～授業づくりから評価まで～」  
各研究員の研究テーマは下記のとおりである。

竹内 理彩	初めての外国語の授業づくりからみえてきたもの ～小・中学校の連携をめざして～
竹内 智哉	使いたくなる英語の場づくり ～児童が英語を学ぶモチベーション～
西村 美里	「書く」を楽しむために ～文字を書けるようにするための取組みでできること～
津本 航佑	今だからこそ小学校外国語専科に求められること ～授業と連携と、ときどき、評価～

## 3 活動概要

### 英語教育研究員連絡会

月に1回程度集まり、竹内教授の助言のもと研究を進めていった。

第1回：英語教育研究会について

第2回：各研究員による今年度の目標（研究テーマ）の設定を報告

第3回：各研究員の研究テーマ及び進捗状況の報告及び講師による指導助言

第4回：教育センターフォーラムリハーサル

第5回：教育センターフォーラム

第6回：1年間のまとめ

### 教育センターフォーラム

平成31年2月20日（水）に開催された第6回茨木市教育センターフォーラムにおいて、4名の研究員が発表を行った。

## 2 初めての外国語の授業づくりからみえてきたもの

### ～小・中学校の連携をめざして～

竹内 理彩

#### 1 はじめに

今年度、6年生担任として外国語の授業を行うことになった。初めて外国語の授業を行うにあたり、授業の組み立てや使用するクラスルームイングリッシュなど、わからないことが多く、試行錯誤しながらの1年間だった。その中でみえてきた成果と課題を、実践や中学校の授業見学、西小学校としての取組みも含めて報告する。

#### 2 小・中連携の視点から

##### (1) 西小学校が行ってきたこと

昨年度、小・中連携担当の白井先生が高学年の外国語の授業にきてくださっていた。

- ①西陵中学校ブロックで、指導案や掲示物、評価の仕方などを市内共有フォルダに入れて共有。
- ②授業中のあいさつの仕方やアクティビティなど、中学校とおなじものを行っている。

##### (2) 中学校の授業の見学

学びのシンポジウムで西陵中学校の石沢先生の授業を見学させていただいた。

内容：中学2年生「こんな人になりたい」

- 赤文字を変えるなどして、モデル文からその場で自分の言いたいことを表現していた。
- スピーチの際にもジェスチャーや抑揚をつけるなど、相手意識を持った伝え方をしていた。

#### 3 初めて外国語活動を行うにあたって行ったこと

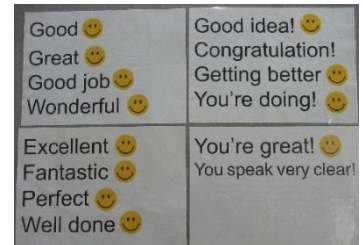
- ①教師用教科書よりめあての確認を行い、どの構文や単語を学習するかを確認した。
- ②校内の先生方の授業より学ぶ。
  - あいさつ（はじめに何と言って授業に入るのか）（終わり方）
  - 1時間にどのくらいアクティビティを行うのか
  - ルールの説明の仕方
  - さわがしくなってしまったときの対応
- ③昨年度行った活動やアクティビティから学ぶ。
- ④指導書から様々なアクティビティを知り、モジュールの時間を中心に行う。
- ⑤クラスルームイングリッシュをメモして少しずつ使っていく。

使用しているクラスルームイングリッシュ

“Let's start English!”	“See you next time.”	“This is today's goal.”
“Make pairs.”	“Are you ready?”	“Stand up.”
“One more.”	“That's right!”	“Close!”

“Good challenge!”	“Excellent!”	“Getting better.”
“That’s all for today.”	“Perfect!”	
“Good!” “Great!” “Good job!”	“Put your desk back.(⇔front)”	
“Sit down. ”/ “Take your seat.”	“Open your text book page ~.”	

⑥ 誉め言葉を教室後ろの黒板に貼る。(教員が困ったときに見たり、児童が慣れ親しんだりすることができる。)



#### 4 校内研究授業の様子

内容：『We Can! 2』 Unit 8 “What do you want to be?”

- ① “What do you want to be?” の表現、職業の言い方に、様々なアクティビティを通して慣れ親しませる。(ジェスチャーゲーム、聖徳太子ゲーム、“Who am I?” ゲーム、カード集めゲームなど)
- ② 『夢宣言』を書くときに使用するほかの表現も、復習を兼ねて紹介する。  
 (“I like ~.” “ I’m good at ~.” など)
- ③ スピーチ原稿を書く。(イラストと単語やフレーズのカードを用意し、切り貼りすることで文章をつくる。)
- ④ ペアで練習し、一文目 (“I want to be ~.”) は暗記してアイコンタクトを取りながら話せるようにする。
- ⑤ 『夢宣言』を行う。それぞれの職業の名刺カードを持ち、交換する。(たくさんの友だちに聞くほど、多くのカードを得ることができる。)

#### 5 成果と課題

(1) 研究授業を通して

はじめは、授業の中に様々なアクティビティを入れていたが、練っていく中でそれがめあてに合っているかということ考えた。児童にどんな力をつけたいのかを明確にし、そのために必要な活動をするということの大切さを改めて学んだ。

ふりかえりシートからも分かるように、児童は、本時の目標を達成することはできた。これから、スモールトークなどを繰り返し、その場で考えたことを、学んだ表現を使って伝えることができるように学習を進めたい。

(2) その他

授業の流れ、あいさつなどをいつも同じものにするすることで、児童が安心し、英語の表現に慣れ親しむことができる。中学校へ進学したときにも、同じようなあいさつやアクティビティがあると、安心につながる。

決められた表現に慣れ親しむことはできたが、習得することが課題。学んだことを忘れずに積み重ねていくために、授業の始めに復習の活動を入れるなどの工夫が必要であると感じている。

今後、学校全体で同じあいさつや誉め言葉、掲示物を使用していくことで、1年生からの積み上げをしていきたい。

### 3 使いたくなる英語の場づくり

#### ～児童が英語を学ぶモチベーション～

竹内 智哉

##### 1 はじめに

新学習指導要領において、5・6年生で外国語の教科化、3・4年生で外国語活動の導入が決まってから、英語好きな子どもを育てようと、教職員の試行錯誤が日々行われている。

その中で学ぶ側の子どもたちは“英語”をどのようにとらえているのか。自分に必要だと思っているのか。このような疑問を出発点に、アンケート調査を行い、その結果からみえてきたことをヒントに4年生の視点で実践を行った。

##### 2 児童の実態調査の結果から

###### (1) アンケート調査から

子どもは英語をどのようにとらえているか知るために、本校の4・5・6年生から各1クラス（計95名）にアンケート調査を行った。アンケートには、英語の「必要性」に関する項目、英語習得のための「努力」に関する項目、英語の「価値」に関する項目を設けた。集計の結果、以下ようになった。

	質問内容	肯定的回答	否定的回答	項目ごとの肯定的回答
必要	英語を話せると役に立つと思う	88%	12%	88%
	英語で話せた方がいいと思う	86%	14%	
	大人になったら英語は必要だと思う	89%	11%	
努力	英語を覚えるためにがんばっている	79%	21%	79%
価値	英語を話せるとかっこいいと思う	77%	23%	83%
	英語で話せるようになりたい	83%	17%	
	英語を聞きとれるようになりたい	86%	14%	
	英語を書けるようになりたい	80%	20%	

英語の「必要性」と「価値」に対する肯定的な回答の割合と比較すると、英語習得のための努力に対する肯定的な回答の割合が若干低くなっている。

この結果から、今まで“楽しい英語”を意識していたが、項目の中で少し低くなっている“努力したくなる英語”も意識できれば、さらによくなるのではないか。そのためにはどのような場の設定ができるのか考えることにした。

###### (2) 児童の英語を学ぶモチベーションをさらにあげるために

児童がより意欲的に英語を学べるようにどのような場の設定ができるか考える中で、以下のような場面で、児童は英語に対してさらに意欲的になるのではないかと考えた。

- ・英語でコミュニケーションを取りたい人と出会う
- ・身近なところの英語を使う目標となる人と出会う

どの学校でも校内で行えるような、“高学年との英語交流”を通して児童の英語に対する意欲をさらに高めることができるのではないかと考え、実践を行うことにした。

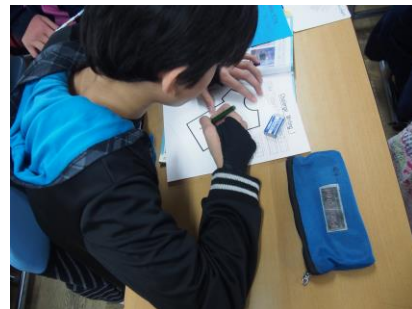
### 3 6年生との英語交流

#### (1) 準備

4年生と6年生で簡単な英語の交流を行うことにした。英語を話す6年生の姿を見ることで、4年生の英語に対するモチベーションがさらにあがることに期待した。

6年生の英語の時間を使い、英語交流の場を設定することにした。

- ① 4年生が自分の好きな色と動物を書き、6年生に英語で伝える。
- ② 6年生が読み取り、Tシャツをデザインする。



#### (2) 活動の様子

4年生は、来年度からはじまるモジュールの様子を見学するつもりで行っていたので、流れをつかみきれない児童もみられたが、事情を知っている6年生のリードもあり、4年生も徐々に積極的になっていった。(カードの色を8色にし、6年生を8グループに分けた。

4年生がどの色のグループに会話に行けばよいかわかりやすくすることで、自分のTシャツをデザインしてくれた6年生を予想できるようにした。)

その後、各教室でふりかえりを行った。



### 4 成果と課題

今回の英語交流は、4年生にとっても6年生にとっても楽しい取組みになった。4年生は来年度からはじまる外国語の雰囲気をつかむことができた。また、6年生が英語を話す姿に驚きながら、2年後の自分の姿をイメージできたようだった。

6年生も自分の英語が伝わったことで1年間学んできたことへの自信に繋がった。また、自分が描いたTシャツを見て喜ぶ4年生の表情が心に残ったようだ。

取組みを終えて、検討の余地があると思ったことが3点あった。1つめは交流に必要なやりとりの数についてである。今回は好きな色を2色と好きな動物のみであったが、さらなるやりとりも考えられたらだろう。2つめは対象になる人の数についてである。今回は色をかえることで相手がみつかる確率をあげたが、それによって1回のやりとりで相手をみつけるペアが多くみられた。3つめは早く相手が見つかったペアの動きについてである。今回は、カードを受けとることをゴールに設定したが、せっかくできたペアなので、さらなる交流も考えられたかもしれない。

高学年は、英語を学んできた時間が長くなるので、より効果が出るかもしれない。この取組みは、継続されることでさらに効果がでると思う。校内で継続して取り組んでいけるような体制づくりを行っていきたい。

## 4 「書く」を楽しむために

### ～文字を書けるようにするための取組みでできること～

西村 美里

#### 1 はじめに

新学習指導要領の全面実施に向けて、今できることは何かと考えながら、5年生の子どもたちと外国語の学習を進めてきた。新学習指導要領では、「読むこと」「書くこと」の領域も増え、新たな挑戦が求められている。5年生の子どもたちは、活字体で書かれた大文字に関しては「これがAだ。」と、音と形が一致してきている。しかし、単語カードや『We can!』でよく目にするのは小文字である。子どもたちのつまずきからスタートし、楽しみながら文字を書けるようにするために実践した取組みを報告する。

#### 2 児童の実態を調査

##### (1) アンケート調査から

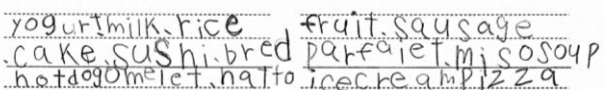
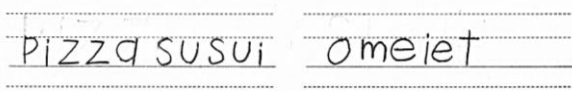
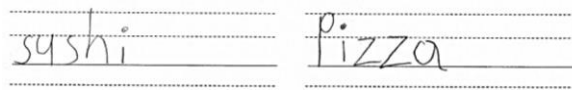
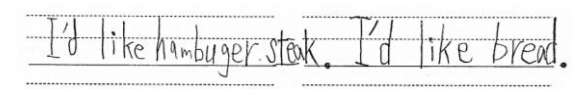
大文字と小文字の書き取りを何度か経験してきた子どもたちに、どれくらい文字が読めたり書けたりするかというアンケート調査を行った。

	質問内容	到達度			
		100%	70%	50%	30%
1	大文字 (ABC) を見て、どれくらい読めますか？	29 人	4 人	3 人	0 人
2	大文字 (ABC) を聞いて、どれくらい書けますか？	24 人	8 人	3 人	1 人
3	小文字 (abc) を見て、どれくらい読めますか？	16 人	14 人	2 人	4 人
4	小文字 (abc) を聞いて、どれくらい書けますか？	15 人	11 人	3 人	7 人

設問が進むにつれて、子どもたちにとっては難しい課題であることがわかるが、それと同時に、これまでの学習量が関係していることも推測できる。

##### (2) 4 線の上に書いた文字

1 学期のある日、単元の中に出てくる単語を書き写すことに挑戦したことがあった。子どもたちの実態を知るために、この日は敢えて何も言わず、自由に書かせてみた。その実態は様々であり、子どもたちにとって「書くこと」は難しいことだと感じた。

1		△ 4 線の使い方がわかっていない。
2		△ 地下一階が使えていない。
3		△ 大文字が混ざっている。
4		◎ 4 線がきちんと使え、単語と単語の間にスペースがある。

### 3 取り組んだこと

#### (1) 大事にしたこと

「書く」といっても、ただ書き写すという作業になってはいけない。そのため、フォニックスなどを通して音声に十分に慣れ親しむことを一番に考えた。そして、ただたくさん書くのではなく、文字の形をしっかりと見て書く習慣を身につけさせること、「書く」という領域にも、ゲーム性を持たせ主体的に学習できることを大切にしたい。

#### (2) 文字の仲間わけゲーム

4線の上に書かれた大文字、小文字のカードを用意し、どんなルールで仲間わけできるか考えるアクティビティである。子どもたちからは次のような意見が出た。

- ① 曲線がある文字と、直線だけでできている文字
- ② 直角がない文字と、直角がある文字
- ③ 大文字と小文字の形が同じ文字と、大文字と小文字で違う形の文字

その他にも、左右対称の文字を見つけた子や、似ている文字に目を向けた子もいた。

#### (3) 4本の線にひと工夫

『We can!』では、基準となる第3線の色を変えたり、第2線と第3線の間を広くしたりする工夫がされている。それに加えて、ひらがな学習のときと同じようなイメージで、部屋ごとに動物の名前を付けた。イラストが視覚支援となり、「書くこと」が苦手な子どもたちが楽しいと思えるきっかけになった。

#### (4) 音楽に合わせてダンス

ABCソングやフォニックスに合わせて、手を動かしながら体で4線の位置を意識させるアクティビティである。その文字がどの部屋に入り、どれだけのスペースを使って書くのかを体で感じる事ができた。大文字はどれも同じ動きになるが、小文字はそうはいかないことで、子どもたちは苦戦しながらも楽しく取り組んでいた。

### 4 成果と課題

文字の仲間わけを通してお互いにクイズを出し合ったり、音楽に合わせて体を動かしたりすることで、「書く」という領域でも子どもたちが主体的に学習できる取り組みがたくさんあることがわかった。また、これまでの外国語の授業の中に「書く」時間が加わることで、45分の授業にメリハリが持てた。コミュニケーション活動を通して外国語を使い、その言葉を今度は書いてみるという活動が、子どもたちに「英語が書けた。」という喜びを感じさせるようであった。

一方で、課題もある。外国語に限らず、学習に苦手意識を持つ子どもたちにとって、やはり「書く」という活動は難しい。単語カードや教科書には4線が書かれていないものも多く、いざ書くとしたときに、それを見ながら書き写すという作業はかなり難しい。そこへの支援と学びやすい環境を整える必要がある。そして、今後「語順や単語のまとまりを意識して書く」という段階へステップアップしていくために、どのような取り組みが進められるのか、研究を進めていかなければならない。



## 5 今だからこそ小学校外国語専科に求められること

### ～授業と連携と、ときどき、評価～

津本 航佑

#### 1 はじめに

今年度、小学校外国語専科として、本校区内小学校の5・6年生の外国語の授業にかかわることになった。今年度と来年度の2年間は外国語教科化への移行期間にあたり、実施に向けた土台作りが求められている。今年度は、授業、小中連携、そして評価と、1年で様々な壁にぶち当たり、その都度考え、実践することとなった。

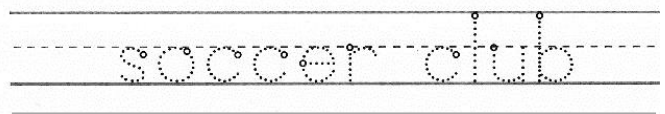
#### 2 授業について

##### (1) 「選択する」ことによる主体性

小学生は、中学生と比べて「自分のことを言いたい！聞いてほしい！」という思いが強い。それを活かして、自分の好きなことなどを選択して伝えることで意欲につながるようにしている。

##### (2) 書くこと

書き写す前に必ず「なぞる」ことをしている。Web上になぞる練習をする用紙作成ができるページがあり、それを活用している。なぞる練習をした後に書き写すと、比較的丁寧に書くことができる。



#### 3 小学校と中学校の連携～小学校卒業後を見据える～

##### (1) ローマ字

小学校3年次に習う訓令式ではなく、中学校での学習を見据え、5・6年生ではヘボン式に慣れる必要がある。特に名前を書くときに混同することがある。また、ヘボン式は英語のスペリングにも大きくかかわっているため、訓令式のままで中学校入学後に生徒が戸惑うことになる。

##### (2) 英語の授業はパーティーではない

無理にテンションを上げて臨む必要はない。また、授業内の活動はただ単に fun な活動なのか、interesting を含む活動なのかを見分ける必要がある。それによって、外国語の授業が単なるイベントではなく、学習としての軸を持つことになる。

##### (3) 過去に戻れる仕掛け

中学校卒業時にどんな力がついているかを明確にし、それをもとに逆算をする。例えば、中学校3年で **Definition** の活動をするとき、「中学校2年では **It's something when you use ~.を**」、「小学校6年では **Yellow, Circle** を使ったな」と過去に戻れるような仕掛けが必要となる。また、同じような活動でも、**Reasoning** させたり、**Logicity** を求めたりするなどして、レベルアップさせることもできる。

## 4 評価について ～「思考・判断・表現」ってなんだ～

### (1) 思考とは「見方・考え方」

「…コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて、情報や自分の考えなどを形成、整理、再構築すること」（平成 29 年小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編より）とある。私は「考えを形成し、再構築する」というようにシンプルに理解するようにした。例えば、よく好きな食べ物とその理由を伝える活動があるが、嫌いな食べ物とその理由の方がより一層バラエティに富んだ考えが形成されるのではないかと考えた。また、「おすすめの国」を伝える活動でも、「一緒に旅行に行く計画を立てる人を説得する」という場面設定をすることで、ただ単に自分の好きなことを言うのではなく、相手が求めていることに合わせてその国のおすすめを考えることになる。

### (2) 評価をどこでつけるのか

観点によっては振り返りシート等で評価できるかもしれないが、話す（やり取り）に関しては同時に何人もの児童の活動を評価することなど不可能である。実技に関する観点については、単元終わりにパフォーマンステストを実施するのが適当だと考える。単元終わりまでは「指導に活かす評価」とし、パフォーマンステスト等を「記録に残す評価」として分けるとわかりやすい。

## 5 終わりに

国立教育政策研究所の調査（平成 27 年）では、72.3%（小学校高学年）の児童が「英語の授業が好き」と答えた。我々小学校・中学校の教員はこの数字をどうとるか。また、小学校での外国語科の導入は、中学校での英語授業改革も同時に求めていると言える。さらには、今後、小学校と中学校の外国語の授業の系統性が重要視され、連携システムの実現が急務である。それは他教科でも同様であり、外国語科がモデルとなって他教科等に広がっていくよう務めていきたい。